

# キャリア教育と結びつけた教育実践の研究 —キャリア教育を基盤に位置づけた進路指導の実践—

教育実践力高度化コース

16AD004

榎本 泰

【指導教員】 二宮 裕之 河村 美穂 安原 輝彦

【キーワード】 キャリア教育 進路指導 基礎的・汎用的能力 指導実践

## 1. はじめに

社会環境の変動が激しい21世紀において、社会の変化に流されることなく、それぞれが直面するであろう様々な課題に柔軟かつたくましく対応し、社会人として自立していくことができることを目指す教育が強く求められている。そこで、期待される教育活動が「キャリア教育」である。そのキャリア教育は進路指導・職業教育に限定されたものではなく、教育活動全体を通じて行うべきと強く叫ばれている。そのため、キャリア教育の推進は、従来の教育活動からキャリア教育の観点を「洗い出す」ことが重要と言われている。また、キャリア教育の目指すところは、進路指導のねらいとほぼ同じとの見解も示されている。しかし、進路指導は学習指導要領においては、中学校及び高等学校(中等教育学校、特別支援学校中学部及び高等部を含む)に限定された教育活動であり、現状では入学試験・就職試験に合格させるための支援や指導に終始する、いわゆる「出口指導」となっている場合が多い。それでは本来の進路指導の理念とは反するものとなっている。キャリア教育の中核を担う進路指導であるならば、その指導の本来の理念を実現させることは急務である。

そこで、本研究は進路指導とキャリア教育の関連をより明確にするために、それぞれの目標と内容を構造的に整理し、その意義を改めて明らかにする。そして、キャリア教育を基盤に位置づけた進路指導を行うことで、高校進学を目標とする「出口指導」に傾倒しがちなものを、本来の理念に戻すとともに、より一層充実した進路指導を目指す。そして、そのような進路指導を行うことは、生徒が学ぶことの素晴らしさや学ぶよさを実感できる機会となり、人生を豊かにしようとする態度を育て、21世紀の社会を生き抜く確かな力の育成につながるはずである。また、このような進路指導実践はキャリア教育の推進の姿である。

## 2. キャリア教育とは

### (1) 教育体系としてのキャリア教育

日本の教育にキャリア教育という言葉が現れ、その必要性が提唱されたのは、1999年中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」においてである。その後、キャリア教育は文部科学省内に「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議」が設置され、2004年に再定義された。そして、2011年に中央教育審議会

において定義されたものが、今日のキャリア教育である。加藤敏明(2007)は「進路、就職指導を包含した新しい教育体系の導入に据えられた点に特徴がある」と指摘している。キャリア教育は、各教科や道徳・特別活動・総合的な学習の時間のように、科目として位置づけられたものではなく、新たな教育体系としての教育活動である。

### (2) キャリア教育の定義及び育成すべき力

キャリア教育は2011年に中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)」において「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」と定義された。その定義について、文部科学省「中学校キャリア教育の手引き(以下“手引き”と示す)」では「自分が自分として生きるために、『学び続けたい』『働き続けたい』と強く願い、それを実現させていく姿がキャリア教育の目指す子ども・若者の姿なのである」とある。キャリア教育とは、児童生徒が自らの力で生き方を選択していくために必要な能力や態度を育成することを目標とする教育活動である。

また、手引きにはキャリア教育で育成すべき力として「基礎的・汎用的能力」を示している。それは、「人間関係形成・社会形成能力(他者の個性を理解する力、他者に働きかける力、コミュニケーション・スキル、チームワーク、リーダーシップ等)」「自己理解・自己管理能力(自己の役割の理解、前向きに考える力、自己の動機付け、忍耐力、ストレスマネジメント、主体的行動等)」「課題対応能力(情報の理解・選択・処理等、本質の理解、原因の追究、課題発見、計画立案、実行力、評価・改善等)」「キャリアプランニング能力(学ぶこと・働くことの意義や役割の理解、多様性の理解、将来設計、選択、行動と改善等)」の4つの能力によって構成される。

### (3) 様々な教育活動とキャリア教育の関連

2011年の中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)」では、キャリア教育は、教育活動全体を通じて行うもので、特定の活動や新たな教育活動として設定するのではなく、既存の様々な教育活動をキャリア教育の視点から改めて位置づけを見直し、教育課程における明確化・体系化を図ると示している。

よって、キャリア教育はその目的を理解し、各学校が編成する教育課程のなかに、意図的に示し、組み込む必要のある教育活動である。

(4) 従来の教育課程の構造

教育課程において「生徒指導、道徳、特別活動、総合的な学習の時間、教科（以下“従来の教育活動”と示す）」の関係について学習指導要領から考える。

ア、生徒指導

教育活動全体を通じて、充実を図るもの

イ、道徳

教育活動全体で行い、各教科、総合的な学習の時間及び特別活動と密接に関連させる必要がある。

ウ、特別活動

各教科、道徳、外国語活動及び総合的な学習の時間、生徒指導との関連を図る。

エ、総合的な学習の時間

学校における全教育活動と関連付け、学習や生活において生かし、それらが総合的に働くようにする。

オ、教科

全てが道徳の時間との関連を配慮して行い、いくつかの教科間で関連する。そして、体育・健康に関する指導（以下“体育・健康”と示す）は学校の教育活動全体を通じて行う。

以上から、従来の教育課程の構造を図1のように捉える。

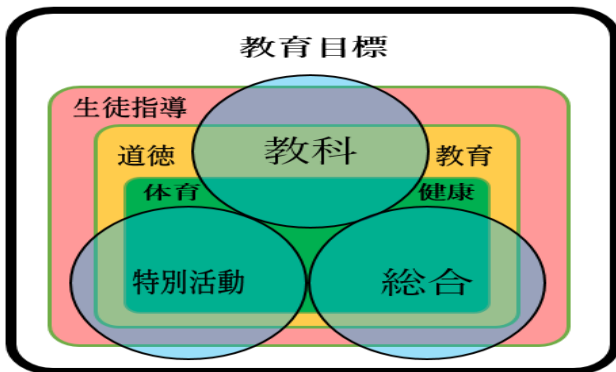


図1 生徒指導、道徳、特別活動、総合的な学習の時間、教科の関係

教科、特別活動、総合的な学習の時間は互いに関連し合う。教育活動全体で行う生徒指導、道徳教育、体育・健康は生徒指導を一番の土台として道徳教育を、道徳教育は体育・健康を包括する関係である。しかし、一番の土台である生徒指導であっても、教科、特別活動、総合的な学習の時間の専門性までは包括しきれないと考える。

従来の教育活動はこのような関係のもと、児童生徒の社会を生き抜く力の養成を目指している。

(5) 教育課程のなかでのキャリア教育の位置づけ

キャリア教育を教育課程のなかに位置づけるにあたり、次のことを理解する必要がある。それは現行の学習指導要領は2008年に本格実施に対して、現在推進されているキャリア教育は2011年に定義されたものである。要するに、現行の学習指導要領には、現在のキャリア教育ではなく、2004年に定義づけられた、勤労観・職業観の育成に焦点が絞られ、社会的・職業的自立のために必要な能力の育成がやや軽視されてしまっているものが反映されているのである。よって、学習指導要領では、キャリア教育は教科を除く従来の教育活動のなかで“勤労観・職業観”“社会との関係”“自己を分析し見つめる力”を育成するための教育活動として示されており、これは現在求められているキャリア教育の意義を反映しているとは言い難い。このことはキャリア教育が特別活動や総合的な学習の時間などに多く、教科指導と切り離してしまう原因となっていると考えられる。

このような背景と今日のキャリア教育は進路、職業選択を促進するだけの教育活動ではなく、教育活動全体を通じて行うものということを理解することは、教育課程の編成に極めて重要なこととなる。

従来の教育活動は児童生徒の社会を生き抜く力の養成を目標とし、キャリア教育は進路、職業選択を促進するだけのものではなく、教育活動全体を通じて行うものであり、自らの力で生き方を選択していくために必要な能力や態度を育成することを目標としている。これらの教育活動の目標はまったく同じものを目指すものである。そして、従来の教育活動の1つ1つの取組において、その根底にはキャリア教育の視点が存在するのである。よって、キャリア教育は従来の教育活動の関係（図1）のなかに点在するのではなく、生徒指導でさえも包括できなかった教科等の範囲でさえも、包括する全教育活動の基礎となる存在なのである（図2）。キャリア教育のもつ本来の意義や価値を考えるならば、教育活動全てがキャリア教育といえるのである。

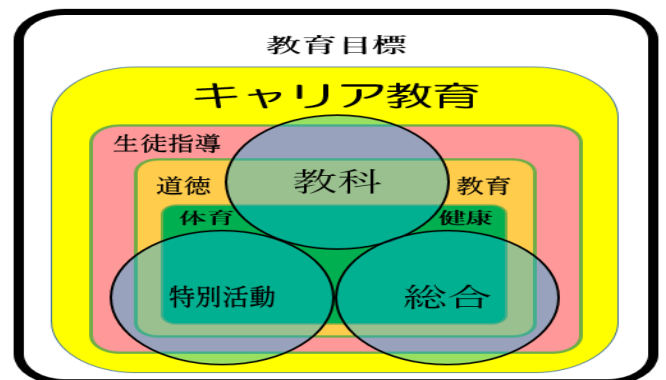


図2 キャリア教育の概念図

3. 進路指導の目標

(1) 進路指導の歴史と定義

手引きによると、進路指導という用語が登場するのは昭和36年である。それまでは「職業指導」とよばれ、文部省『進路指導の手引—中学校学級担任編』日本職業指導協会によって昭和30年に定義され、中学校・高等学校卒業後

の将来を展望し、自らの人生を切り拓ひらく力を育てることを目指す教育活動として、教育課程に位置付けられていた。しかし、職業指導という用語が就職希望者対象の指導との誤解や、職業教育と混同してしまうことから、昭和36年に職業指導から進路指導へと用語が変更された。文部省「進路指導の手引—中学校学級担任編」日本職業指導協会（昭和36年）によると、進路指導は「生徒の個人資料、進路情報、啓発的経験および相談を通じて、生徒みずから、将来の進路の選択、計画をし、就職または進学して、さらにその後の生活によりよく適応し、進歩する能力を伸長するように、教師が組織的、継続的に援助する過程である。」と定義された。その定義は、考え方として、理念を広く解釈することなどが加えられたが、今日まで継続して用いられている。

また、昭和58年に刊行された文部省「進路指導の手引き—高等学校ホームルーム担任編」日本進路指導協会では、「進路指導は、生徒の一人ひとりが、自分の将来の生き方への関心を深め、自分の能力・適性等の発見と開発に努め、進路の世界への知見を広くかつ深いものとし、やがて自分の将来への展望を持ち、進路の選択・計画をし、卒業後の生活によりよく適応し、社会的・職業的の自己実現を達成していくことに必要な、生徒の自己指導能力の伸長を目指す、教師の計画的、組織的、継続的な指導・援助の過程（である。）」とし、「職業的の自己実現」とともに「社会的自己実現」を包含するとの見方も示されている。

【進路指導の歴史】	
昭和30年	職業指導
昭和36年	進路指導
昭和58年	進路指導の手引き
平成29年	キャリア教育

本来の進路指導とは、卒業時の進路選択を含めて、その後の人生をどのように生きていくかという、長期的展望に立って指導・援助するという意味で「生き方の指導」「あり方生き方に関する指導」ともいえる教育活動なのである。

## (2) 学習指導要領における進路指導

現行の中学校学習指導要領解説総則編では「生徒が自らの生き方を考え主体的に進路を選択することができるよう、学校の教育活動全体を通じ、計画的、組織的な進路指導を行うこと。(4 進路指導の充実 第1章第4の2(4))」と示されている。また、進路指導を通して、生徒が自らの生き方を考え、将来に対する目的意識を持って、主体的に自己の進路を選択決定し、生涯にわたる自己実現を図っていくことができるような能力や態度を育成することが重要であると示している。

そのために進路指導は学級活動を中核とし、総合的な学習の時間や職場体験など進路に関わる学校行事の勤労生産・奉仕の行事における職場体験活動などの進路にかかわる啓発的な体験活動及び個別指導としての進路相談を通じて行うものである。そして、それらの実践を行うことが、生徒の「勤労観・職業観の育成」「学ぶ意義の実感」につながることを踏まえて指導を行うことが大切である。

## (3) 中学校の進路指導

手引きによると「進路指導は、従来6つの活動を通して実践される」とあり、文部省「進路指導の手引き—中学校学級担任編（三訂版）」（平成6年）に基づいて表1のように整理している。

表1 進路指導の6つの活動

①個人資料に基づいて生徒理解を深める活動と、正しい自己理解を生徒に得させる活動
②進路に関する情報を生徒に得させる活動
③啓発的経験を生徒に得させる活動
④進路に関する相談の機会を生徒に与える活動
⑤就職や進学等に関する指導・援助の活動
⑥卒業者の追指導に関する活動

また、手引きでは「これまでの進路指導の実践が「出口指導」と指摘され、批判を浴びてきたのは、これらの諸活動のうち事実上⑤に焦点が絞られすぎたからであろう」と指摘している。

本来の理念に基づく進路指導の実践において、①から⑥までの活動を効果的に行うことが、進路指導の充実には不可欠である。

進路指導とは、教師が一人一人の生徒の能力・適性等を把握して、将来（職業や上級学校等）に関する新しい情報を生徒に提示、理解するよう支援を行うことである。また、生徒自らが調べたり、体験したりすることを通じて、自己の能力・適性等を吟味させたり、具体的に進路に関する情報を得させたりすることでもある。そして、進路指導の目標は、生徒が卒業後の進路先において、よりよく適応し、進歩・向上していけるような態度を育成するために行うものである。

このような、本来の進路指導を実践すれば、生徒が学習を受験のためのものなどのように捉えたり、学ぶ意義が見いだせず、見切りをつけてしまったりすることはないのである。

## 4. キャリア教育を基盤に位置づけた進路指導実践の意義

### (1) キャリア教育と進路指導の関連

キャリア教育とは、学校の全教育活動の基礎となる。そして、キャリア教育は「基礎的・汎用的能力」を身につけることによって、「学び続けたい」「働き続けたい」と強く願い、それを実現しようとする姿勢を育てる教育活動である。

本来の理念に基づく進路指導とは、学校の教育活動全体を通じ、計画的、組織的な進路指導である。そして、進路指導はその実践を通して生徒の「勤労観・職業観の育成」「学ぶ意義の実感」を目指す教育活動である。

キャリア教育と進路指導の目指すものは同じである。進路指導の本来の実践を行っていくことは、キャリア教育の実践といえる。また、その実践はキャリア教育の中核となるともいえる。進路指導に対する意識をそのように捉えるならば、進路指導が「出口指導」に終始したものにはなりえないはずである。

また、キャリア教育は全教育活動の基礎ということ、進路指導においても教科横断的な視点をもつことにもなる。よって、そのことは進路指導が、他教科との横断的な視点、社会的な視点を持つこととなり、進路指導の教育的な視野がより広がる。これは、従来の進路指導の本当の理念であり、進路指導の更なる充実につながると考える。

### (2) 進路指導実践で育成できる基礎的・汎用的能力

進路指導の実践は、キャリア教育の実践である。よって、進路指導では「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の4つの能力を全て育成できる。

この4つの能力に関して、手引きでは「これらの能力は、それぞれが独立したものではなく、相互に関連・依存した関係にある。このため、特に順序があるものではなく、また、これらの能力をすべての者が同じ程度あるいは均一に身に付けることを求めるものではない。」と示されている。よって、本研究の進路指導実践においては、4つの能力のうち育成したい能力を焦点化、明確化することが重要と考える。

### (3) 進路指導実践におけるキャリア教育

進路指導の活動はキャリア教育である。例えば、上級学校調べ及び職業調べがある。これらは、中学校卒業後の具体的な進路についてや社会に出てから就く仕事について具体的に知る機会となり、自分の進路や将来を考える活動である。しかし、これらの活動を入学試験・就職試験を目指したものとしては、キャリア教育ではなく、避けるべきで出口指導となる進路指導である。

そこで、進路決定を終着点とする進路指導ではなく、生徒が卒業後の進路先において、よりよく適応し、進歩・向上していけるような態度を目指すものにする。そのために、それらの活動をキャリア教育の「基礎的・汎用的能力」の育成を意識したものにする。そのことで、生徒の勤労観・職業観の育成のみならず、学ぶ意義を実感するものとなる。そのような活動こそが、「学び続けたい」「働き続けたい」と強く願い、それを実現しようとする姿勢を育てる教育活動となる。それこそが本研究が目指す進路指導実践である。

## 5. 授業実践

### (1) キャリア教育を基盤に位置づける進路指導の実践

進路指導の基盤にキャリア教育の視点を意識することで進路指導の視野を広げ、本来の理念に基づいた進路指導を実現させる。本研究における進路指導実践に関しては、6つの活動(表1)を参考にし、それらの実践にはキャリア教育で育成すべき力を明確にした教育活動とする。それらの活動を通して、生徒が卒業後の進路先で、よりよく適応し、進歩・向上していけるような態度の育成を目指す。そして、そのような進路指導実践を通して、生徒の「勤労観・職業観の育成」「学ぶ意義の実感」を経て、「学び続けたい」「働き続けたい」とう姿勢を育成することを目指す。

### (2) 授業実践を行うことで期待できる成果

6つの活動(表1)で「③進路に関する情報を生徒に得させる活動」を通して、「課題対応能力」に関わる、情報の理解・選択・処理、課題発見や本質を理解するを育成できる。

また、「②啓発的経験を生徒に得させる活動」を通して、「人間関係形成・社会形成能力」に関わる、他者の個性を理解する力、他者に働きかける力が育成できる。

そして、それらの活動を独立して行うのではなく、一連の流れのなかでの活動とすることで、「キャリアプランニング能力」に関わる、将来設計や学ぶこと・働くことの意義や役割の理解をが育成できると仮定する。

### (3) 具体的な進路指導実践の内容について

以下に示す進路指導実践を行い、「人間関係形成・社会形成能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」に関わる力が育成できるかを検証する。

#### ① 進路に関する情報を生徒に得させる活動の実践

上級学校等に関する新しい情報を生徒が調べ理解し、それを各自の進路選択及び卒業後の人生に活用できる態度を身に付けさせることを目指す。

##### 【具体的な内容】

- 高校・大学調べ、校内マナー講習
  - ・個人による調べ学習及び新聞づくり  
(情報の理解・選択・処理等)
  - ・グループ模造紙作成及び発表会、模造紙鑑賞会  
(他者の個性を理解する力、他者に働きかける力)
  - ・校内マナー講習  
(情報の理解・選択・処理等、課題発見)

##### 【キャリア教育の視点で身につく力】

「人間関係形成・社会形成能力」  
「課題対応能力」

#### ② 啓発的経験を生徒に得させる活動の実践

生徒が体験活動を通して、実際に経験することで、自己の能力・適性等を吟味する機会となったり、具体的に進路に関する情報を得たりすることを目指す。

##### 【具体的な内容】

- 校外学習
  - ・班行動による大学訪問  
(本質の理解、課題発見)
  - ・食事のマナー講習会  
(情報の理解・選択・処理等、課題発見、評価・改善)

##### 【キャリア教育の視点で身につく力】

「人間関係形成・社会形成能力」  
「課題対応能力」

①②の実践を、一連の流れのなかでの活動とし、キャリア教育の視点で身につく力は、将来設計や学ぶこと・働くこと

の意義や役割の理解である「キャリアプランニング能力」を身に着けさせることを目指す。

そして、それらの検証は、生徒の変容の観察や振り返りなどのアンケート等により確認する。

#### (4) 進路指導実践について

検証する進路指導の実践は、大きく“高校調べ”“大学調べ”“マナー講習”の3つからなる。しかし、大学調べとマナー講習は、校外学習に直接関連するため、「大学調べ・マナー講習」は1つの活動とする。それらの活動は以下のような流れで行う。

表2 授業実践の流れ

期	内容
高校調べ	1 ガイダンス
	2 調べる内容の決定
	3 調べ学習
	4 模造紙作成
	5 発表会
	6 作品鑑賞会
	7 振り返り
大学調べ・マナー講習	1 ガイダンス
	2 調べる内容の決定
	3 調べ学習
	4 新聞作成
	5 校内マナー講座
	6 校外学習（体験活動）
	7 振り返り
	8 テーマ決定
	9 調べ学習
	10 模造紙作成
	11 発表会
12 振り返り	
全体の振り返り	

#### ①高校調べについて

中学校卒業後、多くの生徒が進学する高等学校についてを知る活動は、中学校の進路指導において欠かせないものである。そして、その活動の多くは、生徒が特定の学校についてを調べ、まとめるものである。その場合のほとんどが、自分が進学を考えているものや名前を知っている学校である。そのような高校調べも問題があるわけではないが、多くの場合が同じような内容のものになり、高校案内のパンフレットや紹介冊子のようなものになってしまう。

そこで、個人で行う高校調べの内容の決定(表2-高校調べ-2)は、自分が知りたい“高校に関する何か”について、“複数校”調べる活動とする。このようにすることで、自分が進学するうえで興味を持っていること、進学後に期待していることを優先して考える機会となる。また、自身の抱く

興味、期待に適しているかという視点を持つことで、意欲的により多くの学校を調べる絶好の機会ともなる。この活動で、多くの情報から選択し、理解する能力の育成を目指したい。

次に模造紙作成(表2-高校調べ-4)は、個人による調べ学習を経て、調べた内容が似ている者同士が、グループ(2人以上4人以下)を編成し情報を共有し、模造紙を作成する。作成については、似た内容を調べたにも関わらず、それぞれが調べた学校が異なっていたり、自分では調べられなかった内容との出会いの機会ともなる。そして、その模造紙は、発表の際に重要なものともなることから、まとめ方を相談して工夫するなどの活動ともなる。それを通して、他者との関わりのなかで、考え方などを理解する力の身につけさせたい。

最後に発表会(表2-高校調べ-5)は学年全体で行う。それは、高校のより多くの情報や様々な視点を知る機会となる。しかし、全てのグループの発表を聞くことができないため、さらに多くの情報を得る機会として、作品鑑賞会(表2-高校調べ-6)を行う。発表会では得ることが出来なかった情報に触れると同時に、全ての作品(模造紙)を鑑賞することで、相手に情報を伝えるためのより良いまとめ方などの、効果的に表現する方法にも触れる機会となる。そして、他者理解はもちろん、新しい情報の理解やそれを選択・処理する力を育成を目指す。

#### ②大学調べ・マナー講習について

この実践は、2段階の過程から成る。体験活動である校外学習を境目とし、その前を1段階目、その後を2段階目とした活動である。その活動は、大学、社会的マナーについて考えることを基本とし、1段階目は個人、2段階目は少人数のグループで考え、まとめるものとする。

生徒は卒業後、大学に進学するとは限らない。しかし、どのような過程を経るにせよ、社会人として生活を送る。その社会人として生きるうえで、一般常識や社会的なマナーを知ることは極めて重要である。

そこで、生徒には、高校進学後の人生についてを考えるきっかけとなるような取組を行う。そのことで、今までは深く考えることのなかったことを考え、それを調べ触れることで、今後の人生の可能性を広げる機会とする。

1段階目の大学調べにおける、調べる内容の決定、調べ学習(表2-大学調べ・校内マナー講習-2, 3)は、高校調べと同様にするが、調べる大学は校外学習で訪問予定の6つの大学とする。また、新聞作成(表2-大学調べ・校内マナー講習-4)では、生徒の人生にとって間近に迫ったものではない、漠然としている大学ならば、個人でじっくり考え、それと向き合うことが重要と捉え、グループではなく個人で作成する。そのことで、情報の理解等の力の育成はもちろん、新たな課題などを発見させたい。

次に校内マナー講座(表2-大学調べ・校内マナー講習-5)は、教師が主体となり、様々な社会的な常識やマナーに

ついでの情報を生徒に提示し、それらを知る活動とする。校内マナー講座の具体的な内容は、挨拶・対人、電話・メール、身だしなみ、言葉遣い、食事（和食）の5つとする。

社会的な常識やマナーは、1日の大半を学校で過ごす生徒にとっては、なかなか知る機会がない。また、個人で調べることは大変重要であるが、生活の中でそれらを体験したり、実感したりして、調べるように思う機会は多いとは言えない。よって、生徒が調べることよりも教師が主体となって伝達する活動とし、今後の人生で経験するときに、それらの知識を少しでも活用できる姿勢を育成したい。

次に、校外学習（表2－大学調べ・校内マナー講習－6）は、職業体験等と同様の体験活動として、事前に調べた大学への訪問と洋食を食べながら行うマナー講習会とする。1段階目に各自で調べた大学に実際に訪問し、体験することを通して、調べることだけでは理解しきれないことを、実際に訪問することで実感するための機会とする。また、マナー講習会では、校内での講座にはなかった内容であり、新たな知識に触れる機会とする。それと同時に、受け身で得た情報や知識と、実際に体験し、感じることで得た知識とを比較するきっかけとするためとした。体験を通して、物事の本質を理解したり、新たな課題を発見したりする態度を育てたい。

その後の2段階目では、校外学習で編成したグループで活動し、まとめる内容のテーマ決定、調べ学習、模造紙作成（表2－大学調べ・校内マナー講習－8, 9, 10）をした。その内容については、訪問した1つの大学についてと社会的マナーの両方を、既にそれぞれが1段階目で個人で調べたり、講座から知識を得たりして考えたことと、校外学習で実際に体験し、感じたことを踏まえたものをまとめる活動とする。

この活動では、1段階目と校外学習を振り返ることを目的とするだけでなく、グループ活動による意見交換を通して、他者との関わりをなかで、進路に向けての意欲や新たな発見を目指す。

そして、発表会（表2－大学調べ・校内マナー講習－11）では、校外学習で訪問することが出来なかった、5つの大学についてを知る機会でもあり、社会的マナーについて自分の得た知識やグループでまとめたものとの比較をし、改めて考える機会となるようにした。

### ③振り返りについて

今回の進路指導実践は“高校調べ”“大学調べ”“マナー講習”の3つを、1つの活動としたものである。その活動としては高校調べから始まり、大学調べ・マナー講習という流れとなるようにした。そして、その活動についてを振り返る機会は全部で3回ほど設定する。

1回目の振り返りは、高校調べの振り返り（表2－高校調べ－7）、2回目の振り返りは、大学調べ・校内マナー講習の振り返り（表2－大学調べ・校内マナー講習－12）、最後の振り返りは、今回の進路指導実践の全体を振り返りとして行う。

その3回行った振り返りは、それぞれで行った活動内容を振り返ることはもちろん、それ以外のことを考える機会ともする。1回目では、高校進学以降の将来について、自分の考えなどをまとめる機会、2回目は大学やマナーについて新たに発見できたこと、全体の振り返りでは、進学の目的や進学先で何を学べるか、高校と大学のつながりやちがいが、学校で学ぶことで何が今後の人生において大切かを考える機会とする。

### （5）授業実践における検証

今回の授業実践の検証において、3回行った振り返り（（4）. ③）を利用する。それらの振り返りはアンケート形式のものとして記述式のものになっている。また、アンケートの評価は、4：よくあてはまる、3：あてはまる、2：あまりあてはまらない、1：まったくあてはまらないの4段階とした。また、その対象は1クラス分の生徒のものとする。

#### ①「高校調べ」及びその検証について

検証の対象は30名で、高校調べの振り返り内容は、以下のとおりである。

	質問	4	3	2	1
①	意欲的に調べることができた	70%	27%	3%	0%
②	必要な情報を調べ、収集することができた	53%	47%	0%	0%
③	グループで情報を共有することができた	63%	37%	0%	0%
④	内容を分かりやすくまとめられた	57%	33%	10%	0%
⑤	調べることを通して、新しい知識を得ることができた	70%	30%	0%	0%
⑥	他者の発表を通して、新しい知識を得ることができた	77%	23%	0%	0%
⑦	色々なことを調べることの重要性を実感できた	67%	33%	0%	0%
⑧	高校進学以降の将来について、調べたいと思った	57%	37%	7%	0%

高校調べは、自分で調べたり、他者の発表から情報を得たりすることができ、その重要性を実感できる活動となったといえる。また、②④⑤⑥から、多くの情報のなかから必要な情報を取捨選択し、課題を解決するとともに、新たな情報を得られたと実感できる活動となったといえる。このことは、生徒の情報の理解・選択・処理等の力の育成できた活動となったといえる。そして、③⑥から、他者理解や他者の働きかける力の育成の活動となったといえる。



次に記述式のもので、“将来についてのことで、今後調べてみたいと思うこと”という質問の回答は、仕事が33%、大学が23%、高校が17%、“ある”と答えた生徒が2%、資格が1%、記述無しが17%であった。このことから、将来のことを考えたいという将来設計に対する意欲が育ったといえる。しかし、記述無の生徒が17%ということは見逃せない。高校進学以降の将来についてなかなか関心が向かない生徒に対しての指導として、今回の指導実践ではその意欲の育成には課題があり、改善が必要である。

## ②「大学調べ・マナー講習」及びその検証について

検証の対象は33名で大学調べ・マナー講習の振り返り内容は、以下のとおりである。

	質問	4	3	2	1
①	大学調べを通して新しい発見があった	47%	50%	3%	0%
②	大学調べで得た知識を今後の人生で生かそうと思った	50%	44%	3%	3%
③	大学訪問で新しい発見があった	44%	47%	6%	3%
④	今回訪問しなかった、他の大学も訪問したいと思った	59%	34%	3%	3%
④	大学に入学したいと思った	56%	28%	9%	6%
⑤	校内マナー講座で新しい発見があった	78%	22%	0%	0%
⑥	校内マナー講座で得た知識を今後の人生で生かそうと思った	75%	25%	0%	0%
⑦	マナー講習会で新しい発見があった	81%	19%	0%	0%
⑧	マナー講習会で得た知識を今後の人生で生かそうと思った	75%	25%	0%	0%
⑨	新聞は相手に見やすく読みやすいものになった	22%	59%	19%	0%
⑩	班員と協力して活動できた	75%	22%	3%	0%
⑪	他の人の新聞から得た知識を今後の人生に活かそうと思った	50%	41%	9%	0%

この活動を通して、生徒は①③⑤⑦からも新たな発見ができた実感でき、②⑥⑧⑪から得た知識を今後生かしていこうという意欲が育ったといえる。また、⑨⑩の個人での活動よりも、他者との活動のほうが評価が高いことから、他者と協力したり、他者の考え等を知ったりすることの重

要性を生徒が実感できたといえる。

次に記述式のもので、“大学調べで印象に残ったことを教えてください”“印象に残ったマナー講座を教えてください”“大学訪問で印象に残ったことを教えてください”という質問についての回答を考える。

大学調べで印象に残ったことは、大学の学科や学部についてが最も多く47%だった。その他では、施設等、専門性の高さ、部活動にサークル、就職についてなどがあつた。印象に残ったマナー講座では、食事(和食)のマナーが最も多く66%で、その他の意見は服装、電話や言葉遣いだった。大学訪問で印象に残ったことでは、施設などやキャンパス等の設備についてが87%であった。

生徒の記述のなかで、大学調べの印象で「もっと堅苦しいところだと思っていた。」「想像していたよりもはるかに広い土地」「思っていたより楽しそう」「楽しそうというイメージが変わった」「どの道に進んだ人でも大学に入学していたことにびっくりした」「もっと深く知りたい」というものがあつた。また、大学訪問での印象では「様々な人がいて驚いた」「すごく憧れた」「中学校とは違って一人一人が自由に動いていた」「大学生みんなが楽しそうに笑顔で作業していた」「とても楽しそうなものがたくさんあり、勉強だけというわけではないことが分かった」などがあつた。これらは、自分で情報を選択し、まとめ理解したこと後の体験を通して、実際に調べることの大切さや体験することでより深まることを実感し、そのような活動が物事の本質に近づくことを実感したと考えられる。また、将来に向けての前向きな姿勢が育ったといえる。

## ③「全体の振り返り」及びその検証について

検証の対象は33名で全体の振り返り内容は、以下のとおりである。

		4	3	2	1
①	高校調べを通して新しい発見があった	58%	39%	0%	3%
②	高校調べで得た知識を今後の人生で生かそうと思った	73%	24%	3%	0%
③	高校を卒業することは人生で必要なことと思う	94%	6%	0%	0%
④	大学の印象は訪問前と比べて変わった	33%	61%	6%	0%
⑤	大学を卒業することは人生で必要なことと思う	52%	33%	15%	0%
⑥	高校と大学では大きな違いがあると思う	36%	24%	39%	0%
⑦	高校と大学の繋がりがあつたと思う	42%	48%	9%	0%

アンケートから今回の進路指導実践の調べ学習全体を通して、自分で調べ考え、それを他者と比較したり、共有したりすることへの意識は十分に育成できたといえる。また、③⑤⑥⑦からも、生徒が進路決定を目標とした姿勢ではなく、将来の繋がりを考えて、進学についてはあるが、人生についての多くの情報を得ることやその情報を基に取捨選択し、自分の人生をより良いものにしていこうとする意識が高まったといえる。

記述式の質問で“何のために高校に入学しようと考えているか”について、生徒の回答で「今後の人生で生かすための準備期間」「迷うときになるべく選択肢が多い状態で迷えるようにするため」「自分が就ける仕事の範囲を広くするため」「自分の将来に向けて高校は将来の第一歩に進むものだったから」というものがあった。また、“高校ではどのようなことを学べると考えているか”に対するものは、学問や勉強、新しい知識といったものが61%で、社会や将来に関する知識が21%であった。そのなかで、「人間としての生き方や社会に出ていくためのマナーなどの勉強以外の事も学べる」「礼儀」「自立するのに必要な知識」「社会にでるための必要なこと」「より良い自立心」というものがあった。これはまさに、高校進学はあくまでも人生における通過点であり、その先の自分の将来をより良くするために必要なものという意識が身についたと考えられる。

次に“何のために大学に入学すると考えているか”について、生徒の回答は専門的な学問の知識を得るためや就職のためが88%であった。そして、ここでも「自分の人生をもっと大きく広げるため」「自分の可能性を広げるため、やりたいことをもっと近く実現するため」「社会人に必要なことを学ぶ」というものがあった。また、“大学では、どのようなことを学べると考えていますか”では、先ほどと同様に専門的な学問や就職の知識が82%であった。これらのことから、高校から先の進路である大学は、専門的なものを学ぶためのものであるという認識をしている。そして、“高校と大学との違い”を問う質問の回答では、学問の専門性のちがいを指摘するものもあったが、次に示すことが大変興味深い。その回答は「大学のほうが社会に近い」「責任」「大学は社会人(大人)として一人で生きられる力を養う場」「大学は高校よりも自立心が必要」「自分の責任感の大きさの違いがある」である。生徒は、今回の活動を通して、進学し社会に出ていくことは、どんどん社会生活に近づいていくことであり、一步一步進むごとに責任が増し、自分自身が自立することが必要になってくることを理解したといえる。

最後に、“学校で何を学ぶことが人生において大切と考えるか”の回答では、学問や勉強が45%、人間関係が42%であった。残りは、社会的な常識やルール・マナー、自立心等があった。生徒の感想で「改めて何を学ぶために学校に行くのか分かりました」「自分がどういう大人になりたいか、もう一度考えることができました」「将来何をすることも社会性や自立心も必要だと思った」「結局全て、社会に出たときに関係していることが分かった」とあった。学校では教科の勉

強で学ぶことが重要であると同時に、学校で学ぶことは人間関係を形成し、様々な知識を得るためにも大変重要であるということを理解しているといえる。そして、「高校になんでいくのか、大学になんでいくのかをいつも考えていないことが分かりました」という生徒の感想があった。これは、今回の進路指導実践が、生徒に高校合格が目標達成ではないという意識を、十分に育てた活動となったことの証である。

## 6. まとめ

今回のキャリア教育を基盤に位置づけた進路指導実践では、生徒に“高校合格が目標達成”という出口指導のものにはならなかった。キャリア教育で身に着けさせる力である「基礎的・汎用的能力」の育成を基盤とした活動を行ったことで、進路指導がより視野が広がるものとなったのと同時に、より効果的なものとなった。生徒の進学後の意識は確実に変化し、学校で勉強を学ぶことはもちろん、その他のことを学ぶことの重要性を実感する機会となった。

しかし、勤労観・職業観の育成においては、十分な活動となったとはいえない。また、教科の勉強を学ぶ意義という観点では、学ぶ重要性は実感できたが、学ぶ意義となると十分に実感できたとはいえない。勤労観・職業観の育成においては、そのことに焦点を当てた活動をこれに加えて行うことで、育成を目指す。しかし、学ぶ意義については、全教育活動の基盤となるキャリア教育と同様に、進路指導においても教科横断的な視野にも重点を置く必要があると考える。今後の課題としたい。

キャリア教育の「基礎的・汎用的能力」の育成を基盤においた進路指導実践は、改善の余地はあるが従来の進路指導の理念を満たすものに近づけ、生徒の育成に効果的と考えられる。

## 参考文献

- 加藤 敏明 (2007) . 「キャリア教育の現場から～日本型コーオブ教育の実践と指導法、評価～」
- 埼玉県教育委員会 (2009) . 埼玉県小学校教育課程編成要領
- 埼玉県教育委員会 (2009) . 埼玉県中学校教育課程編成要領
- 文部科学省 (2006) . 「小学校・中学校・高等学校キャリア教育推進の手引―児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために―」
- 文部科学省 (2008) . 小学校学習指導要領解説 総則編・道徳編・特別活動編・総合的な学習の時間編・各教科編
- 文部科学省 (2008) . 中学校学習指導要領解説 総則編・道徳編・特別活動編・総合的な学習の時間編・各教科編
- 文部科学省 (2011) . 「中学校キャリア教育の手引き」
- 文部科学省 (2012) . 「キャリア教育をデザインする「今ある教育活動を生かしたキャリア教育」―小・中・高等学校における年間指導計画作成のために―」
- 文部省 (1955) . 職業指導の手びき-管理・運営編
- 文部省 (1961) . 「進路指導の手引-中学校学級担任編」